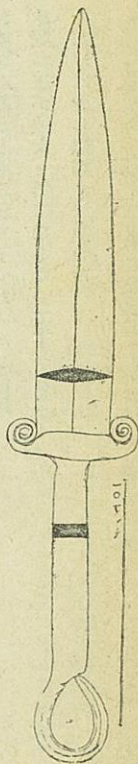


こんな短剣のかたちだけだと、ひとは古代エウラシア大陸の遊牧民に使用されたアキナクス、他名輕呂

劍だとおもふにちがひない、一步すゝんだひとは輕呂劍だが、青銅器時代のものにしてはくせがちがふ、ことによると近代の偽物かも知れないといふ風に考へるに相違ない。しかし事實は、さやうな骨董でなく、またさやうな悪意ある偽作品ではない。大同にちかい陽高縣の上吾其村で現在使用してゐる鐵劍である。

長さは三十センチ、ほとんど輕呂劍と同長、左右の兩刃身の断面は菱形、鐔は上からはめ、兩はしをまけて蕨手状にきりきり旋回してゐる點もまた輕呂劍の意匠である。柄頭はまるい環、これも輕呂劍にふつうみるところである。ことにその鐔の螺旋のごときは輕呂劍の意匠がかうした鐵器の製作過程に出づるのかとおもはずほどであるが、それはもちろん別であつて、別々の發生、偶然の一致といふことになる、そのむかし輕呂劍の分布區域にはいつてゐたこの地方が、いま二千年以上のちにそれとほとんど



同ものを鐵でつくつて使つてゐるといふに至つては、なんともいひやうのない驚きを感じる。偶然の一致かそれとも脈々と暗流する傳統の力か。製作の上、機能の上から一致することを説明しても、結局それは説明にすぎない。

むかし輕呂劍はもちろん第一に武器であつた、いくさの道具であつた。けれどもそのひろい分布のうちにはいまのモンゴルのごとく、肉をさく家庭の利器に使用したのもあつたらうとおもふ。秦式の鏡のうちには馬上でこの劍をもつて怪獸と闘つてゐる圖がある。この陽高の短劍は狼をさす道具だといふ。ちやうどこの邊の狼は、わが國の野猪のやうなものだ。畑はあらさぬけれども、人畜に被害があるので、なんとかして驅除しなければならぬのである。わたくしはこの鐵劍をみ、このはなしをきき、なによりもまづわが國の大きな剛丈な猪つき槍をおもひだした。この二つのものゝあひだはすがたかたちの變化はあつても、なかしら共通なものが感ぜられた。

この劍は買入れたばかりで、柄になにもまいてないが、使用のためには柄や鐔頭に赤いきれをまきもちよくするものらしい。

## 狼をつく短劍 — 民俗雜陳 2 —

みづの・せいち